

特集緒言

特集：教室中心主義からの解放

特集企画者一同

緒言

ことばの学習・教育の分野において、「教育中心から学び中心へ」「教師中心から学習者中心へ」といったパラダイム・シフトが起こって久しい。こういった考え方は、現在では、もはや常識として受けとめられている感さえある。しかし、実際には、「学び中心」「学習者中心」を謳いながらも、その理念を十分に体现できていない実践例も少なくない。その原因のひとつとして考えられるのが、実践の場を教室の中だけに限定していることが挙げられる。教室は、「学び中心」「学習者中心」といった理念を実現させる場としてはあまりに窮屈である。まず、教室は、授業時間という枠で時間的に制限されている。そして、教室においては、授業内容や学習方法があらかじめ定められていることが多い。更に、学習者と教師という関係が固定しがちである。

近年、「学習者主体の教室空間を創造せよ」「教室の中にある教師と学習者の壁を取り払え」「教室内に（留学生）コミュニティを作り出せ」といった理念に基づく教室実践がいくつか見られるようになった。しかし、これらの実践も、やはり「実践は教室で行われなければならない」という教室中心主義に囚われている。学習者が真に主体性を発揮し、有意義なコミュニティを形成すべきは、教師と学習者という役割が定着している教室の中ではない。このような教室中心主義から日本語学習者を解放していくためには、学習者の教室観・学習観に働きかけようとするだけでなく、留学生の教育や支援に関わる者の教育観・教師観・授業観にも大きな変革を求めなければならない。

上述した問題意識にもとづき、私たちは、「教室中心主義からの解放」という特集を企画し、原稿を依頼した。その結果、教室中心主義を手掛かりに留学生の教育や支援に関わる者の教育観、教師観、授業観を問い直す九つの論考が集まった。

基幹論文とした三編は、いずれも2011年度に早稲田大学日本語教育研究センターに開設された留学生支援システムに関する論考である。

黒田論文は、留学生支援システムの理念や全体像を見渡す論考である。留学生支援システムは、早稲田大学に在籍するすべての留学生が日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることにより、自律的な日本語学習を実現できる学習環境を創出し、実り多い留学生生活を可能にする大学空間を創造することを目指している。留学生支援システムという構想において、教室は、学習者がアクセスできる様々な日本語学習リソースの一つに過ぎず、中心的な位置を占めていない。つまり、留学生支援システムは、教室をも含めたより広い「学びの場」を留学生自らが主体的にデザインするという意味において、教室中心主義からの解放を志向するシステムである。

中山論文は、上述した留学生支援システムの支援拠点である日本語チュートリアル（現在は、わけだ日本語サポートに改称）に関する論考である。日本語チュートリアルでは、大学院生の支援スタッフによるナビゲーター、アドバイザー、そして、学習リソースとしての支援活動を行うピア・

サポートが実施された。いわゆる日本語の教室の外で行われる日本語チュートリアルは、それに参加する学習者、支援スタッフの双方が日本語の教室を相対化する可能性を持った活動であると言える。

守谷・尾関・坂田・田中・福池・小高論文は、上述した日本語チュートリアルを担う支援スタッフの行動指針とその育成に関する論考である。本論文では、支援の際のスタッフの行動指針の拠り所となる理論的背景を述べるとともに、スタッフ・ディベロプメントの一環として行われた事例検討会の報告を通して、教員と支援スタッフによる留学生支援のためのコミュニティの創出が提案されている。留学生支援コミュニティの創出は、学習者、支援スタッフのみならず、日本語教育に携わる教員も日本語の教室を相対化する可能性を持つと言える。

寄稿論文とした六編は、いずれも、早稲田大学日本語教育研究センターで行われている日本語教育実践を対象とする実践研究である。

館岡論文と熊田論文は、「『読み』の新展開」というテーマのもと、教室における「読み」の意味を捉え直した実践研究である。（特集テーマにおける両論文の位置づけに関しては、「『読み』の新展開」のページを参照のこと。）

古屋・古賀・三代論文は、「イベント企画プロジェクト」という実践における教師の実践観、教室観、教師観が変容する過程を詳細に記述した実践研究である。本論文では、二つの異なるあり方によるリフレクション、すなわち実践の現状を把握するリフレクションと実践の構造を把握するリフレクションを行き来することが、筆者らの実践観、教室観、教師観の変容を支えていたことが示唆されている。多くの教師が、自身が教室中心主義に陥っていることを意識していない。なぜなら、多くの教師にとって、教室が日本語教育の中心であることは、意識するまでもない当然の前提であるからである。本論文において提案されている二つの異なるあり方によるリフレクションを行き来することは、教師が自身の教室中心主義に気づき、日本語教育実践を多様な観点から捉えられるようになるための一つの手段となる。

中山由佳論文は、「演劇作品制作」という実践を対象とする実践研究である。「演劇作品制作」という実践では、演劇作品の公演を媒介に、教室から社会に向け、何らかのメッセージを発信することが意図されている。多くの日本語教育実践は、教室の中だけで全ての活動が完結するように設定されていることが多く、教室を取り巻く社会は、あまり省みられない。一方、「演劇作品制作」は、社会に向け発信することを前提に活動がデザインされているという点で、教室中心主義から解放された実践であると言える。

中山英治論文は、「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」という実践を対象とする実践研究である。「日本語教育教材考」という実践は、日本語教育に関心を持つ外国人留学生と日本人学生の混在型授業クラスにおいて、映画『男はつらいよ』の日本語教育教材としての価値を考察するという内容である。従来の教材論においては、教材の中身に関し、論じられることが多かった。しかし、本論文で紹介されている実践においては、「学習者と教材」の関係性、「教師と教材」の関係性、「教材化のプロセス」という観点から、映画『男はつらいよ』の教材としての価値が考察されている。このような教材を教室の中だけではなく、より広い文脈において捉えようとする姿勢は、教室のみを見ようとするのではなく、教室をより広い社会的な文脈において捉えようとする姿勢と相通ずる。教材価値論は、教師が教室中心主義から解放されるための一手段とな

る可能性を持っている。

川名・小西・齋藤・坂田・佐藤・田所・田中・水上・宮武・渡部論文は、早稲田大学日本語教育研究センターの初級前半クラスで行われた「日本語かきこ」活動（学生が自分に関することを電子掲示板に日本語で書き込む活動）における教師の取り組みを対象とする実践研究である。「日本語かきこ」活動は、同じレベルの九つのクラスで一斉に実施された。「日本語かきこ」活動を媒介に、教師間の連携が促進され、教師間の連携が互いの実践を改善するという相乗作用＝教師間シナジーを生んだ。「日本語かきこ」活動は、教師が教室で学習者に教授するタイプの実践ではない。そのため、開始当初、担当教師たちに様々な戸惑いが生じた。しかし、教師間の連携をとおして、戸惑いが解消され、最終的には教師間シナジーの形成へとつながった。このような教師間の連携から教師間シナジー形成へと至るプロセスは、教師が教室中心主義から解放されるために必要な環境に関し、示唆を与える。

はじめに述べたように、教室中心主義から、日本語学習者を解放していくためには、留学生の教育や支援に関わる者の教育観・教師観・授業観の変革が不可欠である。本特集が読者諸賢の教育観・教師観・授業観を問い直す一つの機会となれば幸いである。